

胸しめつけられる思い出



小湯の上 中村 勝人

昭和二十年終戦の年、私は三重海軍航空隊にいた。十八歳の少年兵だった。

ある日突然どこへ行くとも知らされぬまま列車に乗せられた。つい数ヶ月前に通った名古屋の町は、天守閣もなく一面の焼け野原だった。東海道の沿線もすっかり焼かれ、竹やぶの中の一軒屋まで焼けていた。やがて列車は三浦半島の久里浜についた。休むまもなく集合がかり、海軍中尉が説明をした。「おまえたちは今日から海軍陸戦隊に編入する。我が海軍陸戦隊は機械化部隊である。米軍の本土上陸に備えて訓練を行う。装備は次の通り。」と発表された。

戦車に艦砲を搭載した自走砲、

山砲、短十二糎砲、噴進砲、迫撃砲などであった。中でも噴進砲には目をみはった。工場の煙突ほどもある砲身である。中尉は説明した。「これはロケット砲である。弾が回転して飛ぶためほとんど命中率はない。敵の心臓を寒からしむるのが目的である」と。

私は迫撃砲隊に入れられた。銃身や三脚や弾薬箱などそれぞれにかついで真夏の山中を汗みどろで走り回った。食事は大豆のゆでた物と乾燥醤油の汁だけだった。夜は物資の警戒に農家の前に立たされた。私の連れは昼間の疲れで眠ってしまった。見回りに来た将校に、殺されるのではないかと思うほど殴られた。

そんなある日、突然集合がかけられた。ラジオがかけられた

が、ただガアガア鳴るばかりで何が何だかさっぱり判らなかつた。突然一人の将校が高い



所へ飛び上がって叫んだ。

「畏れ多くも天皇陛下には、皇国の重大事にかんがみ、一層の努力をせよとのことである。中には、日本が負けたなどと言いつらす奴がいる。ここへ出て来い。私が一刀両断にしてやる。」と、刀を抜いて怒鳴っていた。

いよいよ復員が決まった。東京の守備隊の募集があつたが断つた。一日も早く帰りたいかつた。二百円札二枚もらつて、鈴なりの列車に乗って帰つてきた。

下諏訪の町は静かであつた。夏の太陽が照り返す立町の坂をわずかばかりの食糧と衣服を背負つて帰つてきた。父がいた。母がいた。妹や弟もいた。

ほつとしたのも束の間、この日から苦労の日々が続くのである。肥やし担ぎから旅の飯場への出稼ぎ、山仕事など。さつ

芋や高粱(こうりやん)タカキ(ビ)などを食べ、力の限り働いた。私は病気になるってしまった。母は無理がたつた四十歳の若さで亡くなった。今でもあの頃を思い出すと胸がしめつけられる。



戦後の食事

毎日毎日の食事はさつまいもや雑炊ばかり、少しばかりの米に野菜をまぜて煮る。男の子には多く盛り、おばあさんには少ない。

(平成十七年高齢連だより「黎明」十五号より)

限りない平和を求めて



町屋敷 山崎 義雄

と信じている。まもなく、終戦の日がやってくる。平和を願い、考える日にしたい。

去年の下諏訪町戦没者追悼式に参加させてもらった。冒頭に下諏訪町の中学生が「広島平和教育体験研修」に参加したときの報告がされた。「広島平和記念資料館の展示物を見て」、「被爆体験者の話を聞いて」、「平和記念公園の意義を知って」、こ



中学生による広島平和体験研修の報告

昭和二十年八月十五日。当時、六人兄弟姉妹の五番目の私は四歳、妹は生まれたばかり。父は商売菓子屋道具を供出させられ失職、やむなく行商を始めたと言う。両親にとつて戦後の衣・食・住の確保には、筆舌に尽くせない苦労があつたことと思う。日本中がこの苦難に立ち向かつていた時代だったのだが、この苦難を国民に押しつけた戦争とは何だったのだろうか。くしくも「辛抱」「我慢」の忍耐力、精神力を身に付けさせてもらつて、六人の兄弟姉妹は平和な今日を生かさせてもらつている。私たちの世代はこの力を持つているので、多少の事(電力不足やそれに伴う困難等)には打ち勝つことができる

八月のこゑ

八月一日の行事「遷座祭」は二月一日に秋宮から春宮に移された御霊代を再び秋宮へと遷座する祭りだ。

昔から諏訪の「はだか祭り」とも呼ばれていた「お舟祭り」は、威勢のいいことで知られている。当時の御頭郷(祭りの担当地区)の若者が腹巻きに禪一本の姿であつたところから、その名がついたようだ。

柴舟の青葉の匂い遠座祭

中島千津子

柴舟を組み合わせ、青葉で飾られた柴舟が右に左に盛んに揺すられると、あたりは人々の喚声と青葉のみずみずしい香りに包まれる。

やがて、柴舟が秋宮の鳥居にさしかかる。そのほとりの千尋池に提灯の明かりが灯される頃になると、いよいよ柴舟が神楽殿の周囲を回る。祭りのクライマックスが始まる。



祭りのクライマックスが始まる。(篠遠)